

アンコール・ワット西参道修復工事（第2期）起工式

Concerning the Ceremony Associated with the Restoration of the Angkor Wat Western Causeway

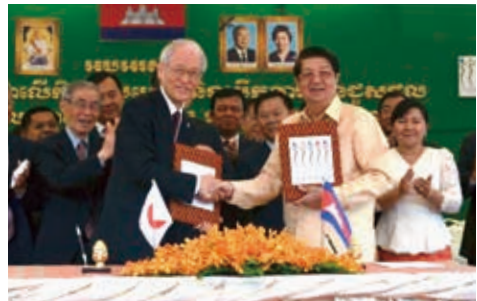
ពិធីបើកការដ្ឋានជួសជុលស្ពានហាលអង្គរវត្ត នៅដំណាក់កាលទី២

アンコール・ワット西参道第2期工事修復工事の起工式が下記により執り行われた。

第1期工事は1996年に開始し2007年に完成した。第2期工事は、日本の外務省のODA（一般文化無償協力）の採択により、日本からクレーンをはじめ多くの機材の提供を受けて行われる。実施体制は、上智大学（アジア人材養成研究センター）とカンボジア国立アプサラ機構との共同事業として行う。

式典にはカンボジア政府から第一副首相はじめ閣僚が、日本政府からは隈丸駐在大使ほか要人が出席、約1,000人の関係者の参加を得て盛大に行われた。

式次第は以下のとおり。



「上智大学とアプサラ機構の協定書」署名式が、Sok An カンボジア王国政府第一副首相および上智学院高祖理事長により行われた。

起工式式典（第2期）

○日 時： 2016年5月9日（月）

現地時間：午前7時30分～9時30分（日本時間：9日午前9時30分～11時30分）

○会 場： カンボジア王国シェムリアップ州シェムリアップ郡ノコール村アンコール・ワット西参道前の仮設式場

○主 催 者： 上智大学（アジア人材養成研究センター）

カンボジア王国政府アンコール地域遺跡整備機構（略称：アプサラ機構）

◇式次第（使用言語はカンボジア語と日本語）

仏教僧侶による読経

両国国旗掲揚および国歌斉唱

開会の辞 アプサラ機構総裁 Sum Map 閣下

◇式 辞

「アンコール・ワット西参道を修復する上智大学・アプサラ機構の共同工事について」

カンボジア王国政府第一副首相 Sok An 閣下

「カンボジアと日本の文化交流について」

日本国特命全権大使 隈丸優次閣下

「アンコール・ワットとソフィア・ミッション」

学校法人上智学院理事長 高祖敏明教授

「アンコール・ワット修復を通じてカンボジアと日本の技術交流」

アプサラ機構遺跡局長 Ly Vanna 博士

○祝 辞： シェムリアップ州知事閣下

○お祝い奉納古典舞踊： アプサラ・ダンス カンボジア宮廷舞踊団

◇主な出席者

〈カンボジア王国政府〉

カンボジア王国政府第一副首相 Sok An 閣下

カンボジア王国政府文化芸術省大臣閣下

カンボジア王国シェムリアップ州知事閣下

〈日本国側〉

日本国特命全権大使 隈丸優次閣下、元大使 篠原勝弘閣下、前大使 黒木雅文閣下

独立行政法人国際交流基金理事長 安藤裕康

学校法人上智学院理事長・上智大学教授 高祖敏明

上智大学アジア人材養成研究センター所長・教授 石澤良昭

上智大学アジア人材養成研究センター客員教授（日本大学名誉教授） 平山善吉

上智大学アジア人材養成研究センター研究員（アンコール建築史学） 三輪 悟

同

（アンコール遺跡環境学） ラオ・キム・リアン



起工式は Sok An 副首相のクレーン車のスイッチとともに開始された。



式典には村人および小・中・高校生約1,000人参加した。

資料

1. アンコール・ワット西参道

- (1) アンコール・ワットの入り口参道であり、陸橋200m、外から見えるラテライト（紅土）擁壁の内側は土砂版築層、その上に砂岩の敷石を乗せた参道歩道
- (2) 西参道の崩壊と修復事例
 - ①1952年大洪水で擁壁一部崩落と倒壊
 - ②1960年代フランス極東学院が参道幅12mの南側半分を修復
 - ③北側半分の工事は内戦のため中止
- (3) 西参道は
 - ①創建当時（12世紀前半）の王が馴象に乗り行幸するために敷設された道路であり、この参道は正式な入り口
 - ②参道入り口から本殿まで540mの距離
 - ③参道に塗り込められたヒンドゥー教の篤信装飾装置
 - A) 西参道は200mの環濠の上を左右に見ながら、天空を歩く如くの浮き橋建築様式となっている。
 - B) ナーガ蛇神（水神）の胴体が欄干を縁取り、天空の神の世界を歩くが如し。
 - C) 五基の大尖塔（須弥山を模した）を眺め、蛇神欄干に触りながら信仰心を高め、本殿に入っていく。
- (4) 参道入口の9頭のナーガ蛇神像彫刻は、評価の高い大傑作（現在は復元レプリカ）。邪な心を持った者を一喝する迫力にあふれ、圧巻のアンコール彫刻装飾である。
- (5) 上智大学は現地にアジア人材養成研究センターを建設（1996年）し、保存官等の養成およびカンボジアの歴史・文化・研究・調査し、日・カの学术交流研究拠点とした。
- (6) 1996年に着工された西参道（第1工区100m）の修復は、「カンボジア人の手によるアンコール・ワットの修復」を掲げ、カンボジア人保存官候補者に、土木・建築・考古の技能研修を実施しながら、石積みの建築技術を検証し、12年かかって完成。当時内戦後カンボジア人を元気づける文化復興のシンボルとなる。困難な社会情勢のさなかにあって、2007年に第1工区100mが完成した。

2. アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会の発足（2015年3月）

アンコール・ワット西参道修復技術交流研修委員会合同委員会が2015年3月に発足し、これまでに両国の合同委員会が2015年3月・12月、2016年1月の3回にわたり日本とカンボジアにおいて開かれた。

技術交流研修：日本委員会委員

調査団長	石澤良昭（上智大学教授）（カンボジア碑刻文学・アンコール史学）
委員長	平山善吉（日本大学名誉教授）（建築構造力学）
委員	丸井雅子（上智大学教授）（アンコール考古学）
	竹田哲夫（リテック・エンジニアリング顧問）（橋梁工学）
	清水五郎（日本大学上席研究員）（建築材料学）
	腰塚達郎（元清水建設執行役員）（建築安全工学）
	柿崎正義（スマート建築研究所 代表取締役）（建築施工学）
	坪井善道（元日本大学教授）（建築工学）
	半貫敏夫（日本大学名誉教授）（建築構造力学）
	岸 明（岸エンジニアリング代表）（建築工学）
	小島陽子（日本大学助教）（アジア建築史学）
	三輪 悟（上智大学研究員）（アンコール建築修復学）
	ラオ・キム・リアン（上智大学研究員）（建築環境学）

技術交流研修：カンボジア委員会委員

H.E. Dr. Sum Map	アプサラ機構総裁（フランス・リヨン第2大学経済学博士）（経済協力論）
------------------	------------------------------------

H.E. Mr. Seung Kong	アプサラ機構副総裁（前カンボジア文化省局長）（教育学）
H.E. Ros Borath	アプサラ機構副総裁（フランス政府公認一級建築士）（建築学）
H.E. Dr. Tan Bounsuy	アプサラ機構副総裁（農学）
H.E. Mr. Sok Sangvar	アプサラ機構副総裁（オーストラリア・シドニー大学観光学修士）（観光学）
H.E. Dr. Hang Peou	アプサラ機構副総裁（水利学）
Dr. Ly Vanna	アプサラ機構 アンコール公園内遺跡局長 （上智大学大学院地域研究専攻学術博士）（考古学）
Dr. Chhean Ratha	アプサラ機構 アンコール公園外遺跡局長代理 （日本大学大学院理工学研究科建築学博士）（建築学）
Dr. Tin Tina	アプサラ機構国際調査研究資料局副所長 （上智大学大学院地域研究専攻学術博士）（文化財保存学）
Mr. Tann Sophal	アプサラ機構保存局副局長（王立芸術大学考古学部卒業）（考古学）
Mr. Mao Sokny	アプサラ機構保存局技官（王立芸術大学建築学部卒業）（建築学）
Mr. An Sopheap	アプサラ機構保存局技官（王立芸術大学考古学部卒業）（考古学）

（文責 石澤良昭）

式 辞

上智学院理事長
高祖敏明

上智学院理事長の高祖でございます。

本日、アンコール・ワット西参道の第2期修復工事の起工式にあたり、ここにご臨席くださいました皆さまに御礼のご挨拶を申しあげます。まず最初に、カンボジア王国政府副首相ソック・アン閣下におかれましては、これまで格別のご指導とご高配を賜って参りました。厚く御礼を申しあげます。

また国立アプサラ機構総裁スム・マップ閣下におかれましては、このたびの共同プロジェクトをお引き受けくださり、とてもうれしく思いますし、御礼を申しあげます。

続いて、日本側でございますが、日本国特命全権大使 隈丸優次閣下にこれまでのご指導とご支援に御礼申しあげます。また、いろいろな面でご支援いただいていた元大使の篠原勝弘閣下は、日本からご出席を賜り、厚く御礼を申しあげます。さらに本日は、国際交流基金プノンペン事務所長 濱田祐生様、三菱商事プノンペン事務所長 有井淳様にご出席くださいました。ありがとうございます。

私は昨日、日本からここシムリアップに参りました。3度目のカンボジア訪問です。1回目は、石澤先生が率いる考古学実習チームのカンボジア人研修生たちが、バンテアイ・クデイ寺院の境内で274体もの仏像を掘り出した直後で、国宝級の仏様の優雅なお顔に感動を覚えたものです。2回目は、10年前のアンコール・ワット西参道の第1期工事竣工式の折で、シハヌーク・イオン（Preah Norodom Sihanouk-Angkor）博物館開館式にも出席いたしました。3度目の今回は、第2期工事の

起工式に上智大学を代表して出席し、同時に、アプサラ機構との協定書に調印するために参りました。

世界の誰もが感嘆する大伽藍で、世界遺産のアンコール・ワット、その西参道の修復を共同工事としてお手伝いさせていただきますこと、私どもに取りましては大変光栄ですし、誇りとするところです。今回の共同プロジェクトには、日本国政府から ODA の修復機材を供与していただいております。日本国政府に改めて御礼を申し上げます。

隈丸大使閣下、ありがとうございました。

石澤先生から伺ったのですが、カンボジアの伝承によると、カンボジアで最も知恵があり、最大の物知りは田んぼの中にいる田螺だそうで、田螺は世の中の出来事をいつもすべて見ている知恵の王様だということです。

私ども上智大学は、104 年前に創設されたカトリック大学で、英語では Sophia University といいます。このソフィアは、ギリシャ語で「叡智」「知恵」を意味しています。ですから、カンボジアの田螺も上智のソフィアも、どちらも知恵、叡智を意味しています。この二つが共同でプロジェクトを進めるわけですから、アプサラ機構と上智大学との間で橋を架けるのみではなく、カンボジアと日本の間に橋を架け、それも世界に向けて両方の知恵を生かした橋を架けるプロジェクトだということになります。

上智大学がアンコール・ワットを中心に展開している教育研究活動は「ソフィア・ミッション」と呼ばれていますが、その始まりは多くのカンボジア人が難民キャンプに避難した時代でした。いまから 37 年も前の 1979 年、当時のヨゼフ・ピタウ学長が先頭に立って「インドシナ難民に愛の手を」という募金活動を日本で行い、その浄財を難民キャンプに届けたのでした。しかし、ピタウ学長はすぐ気づきました。募金で集めたお金を届けるのも大事だが、もっと大事なのは、これからのカンボジアの発展を担う人を育てることだと。

私どものソフィア・ミッションの目標は、'Men and Women for Others' with Others' を育てることです。1980 年代から上智大学はカンボジアに関わり始め、とりわけ石澤先生のチームはカンボジアの文化復興を支援し始めました。そして、「アンコール・ワットはカンボジア人の手で修復する」ことを大きな目標に掲げ、近い将来の保存官候補者を育成する仕事のお手伝いを始めました。1996 年には、シエムリアップに「上智大学アジア人材養成研究センター」を開設し、アプサラ機構の力強いご協力を得て、人材養成に励んで参りました。

その大きな成果の一つが、アンコール・ワット西参道の第 1 期工事の完成でした。皆さまもご記憶のとおり、1996 年から 12 年の歳月をかけ、カンボジアの保存官候補者、作業員、石工約 85 名と協力して西参道 100m を修復し、2007 年 11 月にその竣工を祝いました。この工事完成は、カンボジアの人たちが自らの手で成し遂げた文化復興として高く評価され、全世界に向けてニュースが発信されました。日本では、NHK が「プロジェクト X」という番組で取り上げ、日本人がアンコール・ワットに強い関心を寄せ、大勢でやってくる契機となりました。

これからその第 2 期工事が始まります。第 2 期の強みは、第 1 期のとき学んだ経験が活かしていることと、カンボジアに人材が育っていることです。先ほど私どもがソフィア・ミッションとして、

1996年からシェムリアップのセンターで人材の育成を始めたと申しあげましたが、さまざまな研修を重ねてカンボジアの地で作業員や石工を育てるだけでなく、カンボジア人の保存官候補者をも育て、上智大学大学院へ留学生として招きました。今日まで、博士学位を7名、修士学位11名、合計18名が学位を取得してカンボジアへ戻り、第一線で活躍しています。今回の共同プロジェクト工事担当者およびアプサラ機構の局次長クラスの3名、Dr. Ly Vanna, Dr. Tin Tina, Dr. Chheam Rathaの3名が日本で学位取得した方々です。

私どもとアプサラ機構が目指すアンコール・ワット西参道の修復は、壊れかかった参道を修復すると同時に、学術調査を実施し、いわばカンボジアの田螺が知っている知恵を掘り起こそうとしています。参道がどんな建材や資材でできているか、版築技術の探求と検証、水中考古学による基礎土台の調査、そして、これらがいつの時代に構築されたか、などをも調査・研究し、カンボジアの歴史の解明にも挑戦しています。こうした学術調査によって解明されるカンボジアのいろいろな知恵は、カンボジアの人たちに還元され、民族的誇りを持つことにつながります。文化遺産の研究がカンボジアの新しいアイデンティティへと導くわけです。こうしてカンボジアの人たちは、人類全体の文化発展の中で、カンボジアの歴史と文化の独自性を再発見することになります。

アンコール・ワットの修復と保存の最終責任は、やがてカンボジア人の中の優秀な修復技術者・研究者・保存官・石工の皆さんが担うことになります。ソフィア・ミッションが目標とする‘Men and Women for Others’ with Others’は、相手が主人公になることを喜びます。この意味でソフィア・ミッションとは、人と人の協力による国際支援活動であり、国際的な人材育成と研究活動であり、それぞれが持つ知恵を探し出し、学びあうプロジェクトでもあります。私どもは、このミッションを「叡智が世界をつなぐ (Sophia Bringing the World Together)」と表現しています。このミッションをとおして、言葉や肌の色の違いや文化の違いを乗り越え、国境を越えて信頼関係を築くことを目指しているわけです。

今回のアンコール・ワット西参道の修復活動をとおして、日本とカンボジアの両国の友好と親善がさらに高く積み上げられ、互いの知恵をもって両国を結ぶ架け橋が、「叡智が世界をつなぐ (Sophia—Bringing the World Together)」のモデルとなりますことを念願して、御礼の挨拶とします。ご清聴くださり、ありがとうございました。

式 辞

カンボジア国王

国家宗教国王

閣僚評議会

アンコール・ワット西参道修復第2期起工式スピーチ

副首相兼閣僚評議会担当大臣

ソク・アン閣下

シエムリアップにて2016年5月9日

- 尊敬する僧侶様
- 隈丸優次在カンボジア日本国大使閣下
- 高祖敏明上智学院理事長閣下
- ご来賓の皆さま
- 親愛する国民と学生の皆さま

本日、ご参列の皆さまとアンコール・ワット西参道修復第2期起工式に参加できること、大変うれしく思います。この修復事業は、アプサラ機構と上智大学をとおして、日本政府とカンボジア政府の共同支援によるもので、上智大学アジア人材養成研究センターとアプサラ機構が実施することになります。ここで、カンボジア政府およびカンボジア国民を代表して、隈丸大使をとおして、カンボジアの開発の多くの分野において絶えず協力している日本国政府と日本国民に深く感謝の意を表します。石澤良昭教授が率いる上智大学アジア人材養成研究センターは、保存活動やカンボジアの人材育成、とくにアンコール・ワット西参道第1期修復を含む1989年からの遺跡保存修復に着手され、高く評価します。併せて、アプサラ機構のリーダーや職員各層は文化遺産を守るため、高い意識で日本の友人と協力し合い、多くの誇らしい成果を導き出したこと、高く評価します。

本日の集まりは間違いなく素晴らしい意味を持ちます。

第一に、西参道はアンコール・ワットへの出入り口としてとても大切な参道です。アンコール・ワットは国家のシンボルであり、クメール人祖先の偉大な建築と工学の結晶で、世界最大の宗教建築であり、環濠を堂々と横切った橋が造られ、クメール人にとって深い意味を持っています。アンコール・ワットはヒンドゥー教崇拜のために12世紀に建設され、その後は仏教デヴァダーに変更されました。なんといっても、私たちが現在通っている西参道は約1000年前にクメール国王であったスーリヤヴァルマン2世が宗教行事などを執り行うために通っていたと人々は信じています。宗教と信仰の観点から、この西参道は人間を神の世界に導くものです。長年にわたって、参道はひどく傷んだり、部分部分に修復されてきました。60年代にはフランス極東学院が南半分を修復しました。その後、カンボジアが内戦に入り、修復工事が中断となりました。1996年になって、上智大学の専門家グループがアプサラ機構専門家と共同で未修復の部分を着手し、12年間掛けて長さ90mの第1期修復を終了させました。そして残りの100mを第2期として本日の起工式をもちまして、引き続き修復を行うのです。

第二に、今日の出来事は人類の文化遺産保存修復協力を反映し、「皆のための遺産、遺産のための皆」のモットーに沿うもので、一旦世界遺産リストに登録されれば、所有する国民のみならず、世界人類がその遺産を守る義務があります。この国際協力・連帯の精神はアプサラ機構のパートナーである ICC「アンコール遺跡保存開発国際調整委員会」の強固な基礎であり、23 年間に及ぶ効率的な協力関係を築き上げました。このメカニズムが他の国のモデルとして評価されています。特記すべきことは、シハヌーク前国王がひどく荒れていたアンコール遺跡群の救済を国際社会に呼びかけてアンコールが 1992 年にユネスコ世界遺産リストに登録されたのを受けて、この国際調整委員会は 1993 年に日本国東京会議で設置が決定され、日本とフランスが共同議長を務めることとなります。現在では、ICC アンコールの枠組内で、23 カ国から 30 以上の国際専門家チームが遺跡の保存修復のためにアプサラ機構と協力し 70 余りのプロジェクトを実施しています。この国際協力と努力があって、2004 年に世界遺産委員会がアンコールを「危機遺産リスト」から外す決定を下したのです。日本は多くの国家の中で、重要な役割を担っており、多くの財源と技術をカンボジアに提供し、とくにアンコール地域の遺跡の保存修復に協力し、バイヨン遺跡とこの西参道の保存修復が代表的です。

親愛する皆さま、

カンボジア王国政府は、フン・セン首相の賢明な指導の下で、国の文化遺産の保存と開発が永続できるよう大きな関心を寄せています。「開発のための保存、そして保存のための開発」の視点に立って、開発と保存の調和を図り、国の発展に適切な利益を見出しながら、価値ある遺産を後世に継承するのです。

遺産分野に対する政府の重視は、今までの努力やさまざまな方針を打ち出したことにより証明され、多くの成果を得てきました。事実、プレア・ヴィヒア寺院が 2008 年に世界遺産リストに登録された後、私たちの努力で国際社会から賛同を受け、ICC アンコールをモデルに、ICC プレア・ヴィヒアを設置することに成功しました。ICC プレア・ヴィヒアの初回会議は成功裏に開催され歴史的な成功として記録され、軍事・政治の対立していたプレア・ヴィヒア地域を平和と協力の地域として変えたのです。現在、いくつかの遺跡の保存修復事業が実施されています。これは、ICC アンコール枠組内の成果に加えた新たな大成功です。

今まで遺跡保存修復を成し遂げた成果と同時に課題も残っています。なぜならば、文化遺産の保存修復と開発は広い範囲を有しており、知識と専門を持つ人材、そして妥当な財源を必要とし、終わりのない仕事です。それ以上に、これらの仕事は関係省庁や機関の継続的な努力に国内・国外パートナー、民間と全国民による積極的な参加が求められています。この意味で、カンボジア王国政府として、友好国、国内・国外パートナーに私たちの努力に対して技術・財政・人材を引き続き支持するよう、また関係省庁や機関そして全国民に自分の役割に応じて協力するようお願いいたします。人類の遺産を守るこの素晴らしいミッションは私たち一人ひとりのためです。

ここで、世界遺産であるアンコールの価値を永遠に守ってくださっている日本国をはじめ、他の友好国、国内・国外の専門家たち、各省庁・機関、国民の皆さんに改めて感謝します。

最後に、ご参列の皆さまのご健康とご活躍をお祈りします。

ここで本日、アンコール・ワット西参道修復工事の開始を宣言します。
ありがとうございました。



**ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា
ជាតិ សាសនា ព្រះមហាក្សត្រ**

ទីស្តីការគណៈរដ្ឋមន្ត្រី

សុន្ទរកថា

**ឯកឧត្តមបណ្ឌិតសភាចារ្យ សុខ អេន
ឧបនាយករដ្ឋមន្ត្រី រដ្ឋមន្ត្រីទទួលបន្ទុកទីស្តីការគណៈរដ្ឋមន្ត្រី
ក្នុងពិធីបើកការដ្ឋានជួសជុលស្ពានហាល ប្រាសាទអង្គរវត្ត ជំហានទី២
សៀមរាប-អង្គរ ថ្ងៃទី៩ ខែឧសភា ឆ្នាំ២០១៦**

- សូមក្រាបថ្វាយបង្គំ ព្រះថេរានុញ្ញៈគ្រប់ព្រះអង្គជាទីសក្ការៈ
- ឯកឧត្តម ឌីឌី គីម៉ាម៉ារី ឯកអគ្គរាជទូតជប៉ុន ប្រចាំនៅព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា
- ឯកឧត្តម គុស៊ីនេស៊ី គូសុ ប្រធានក្រុមប្រឹក្សាភិបាលនៃគ្រឹះស្ថានអប់រំសូហ្វ៊ីយ៉ា
- ឯកឧត្តម លោកជំទាវ លោក លោកស្រី ភ្ញៀវភិក្ខិយសជាតិ និងអន្តរជាតិទាំងអស់ ជាទីមេត្រី
- បងប្អូនប្រជាពលរដ្ឋ និងក្មួយៗសិស្សានុសិស្សទាំងអស់ជាទីស្រឡាញ់រាប់អាន

ថ្ងៃនេះ ខ្ញុំមានសេចក្តីសោមនស្សរីករាយ ចូលរួមជាមួយឯកឧត្តម លោកជំទាវ អស់លោក លោកស្រី ភ្ញៀវភិក្ខិយសជាតិនិងអន្តរជាតិ បងប្អូនប្រជាពលរដ្ឋ និងក្មួយៗ សិស្សានុសិស្សទាំងអស់ ក្នុងពិធី «បើកការដ្ឋានជួសជុលស្ពានហាលប្រាសាទអង្គរវត្ត ជំហានទី២» ដែលហិរញ្ញប្បទានអនុវត្តគម្រោងបានមកពីការរួមវិភាគទាន រវាងរដ្ឋាភិបាល ជប៉ុន រាជរដ្ឋាភិបាលកម្ពុជាតាមរយៈអាជ្ញាធរជាតិអប្សរា និងគ្រឹះស្ថានអប់រំសូហ្វ៊ីយ៉ានៃ ប្រទេសជប៉ុន ហើយនឹងត្រូវអនុវត្តរួមគ្នាដោយមជ្ឈមណ្ឌលអាស៊ីសូហ្វ៊ីយ៉ាដើម្បីការ សិក្សាស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្ស នៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វ៊ីយ៉ា និងអាជ្ញាធរជាតិអប្សរា។ ឆ្លៀតក្នុងឱកាសនេះ ក្នុងនាមរាជរដ្ឋាភិបាល និងប្រជាជនកម្ពុជា ខ្ញុំសូមថ្លែងអំណរគុណយ៉ាងជ្រាលជ្រៅតាមរយៈឯកឧត្តមឯកអគ្គរាជទូត គីម៉ាម៉ារី ដល់ រដ្ឋាភិបាលនិងប្រជាជនជប៉ុន ដែលជានិច្ចកាលបានចូលរួមចំណែកក្នុងការអភិវឌ្ឍ ព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា នៅក្នុងវិស័យជាច្រើន។ ខ្ញុំសូមវាយតម្លៃខ្ពស់ចំពោះមជ្ឈមណ្ឌល

អាស៊ីសូហ្វីយ៉ាដើម្បីការសិក្សាស្រាវជ្រាវ និងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្ស នៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា ក្រោមការដឹកនាំរបស់លោកសាស្ត្រាចារ្យ **យ៉ូស៊ីណេគី អ៊ីស៊ីហ្សូម៉ា** ដែលបានចូលរួមក្នុងការងារអភិរក្ស និងអភិវឌ្ឍធនធានមនុស្សនៅកម្ពុជា ជាពិសេសលើជំនាញជួសជុលនិងអភិរក្សប្រាសាទតាំងពីឆ្នាំ១៩៨៩មក ក្នុងនោះ រួមមានការជួសជុលស្ថានហាលនៃប្រាសាទអង្គរវត្តនេះ នៅដំណាក់កាលទី១។ ខ្ញុំក៏សូមសម្តែងនូវការកោតសរសើរ និងវាយតម្លៃខ្ពស់ផងដែរចំពោះថ្នាក់ដឹកនាំ និងមន្ត្រី បុគ្គលិកគ្រប់លំដាប់ថ្នាក់នៃរាជ្យាធរជាតិអប្សរា ដែលបានខិតខំប្រឹងប្រែងបំពេញភារកិច្ចរៀងៗខ្លួន ប្រកបដោយស្មារតីទទួលខុសត្រូវខ្ពស់ និងទទួលបានលទ្ធផលជាច្រើនគួរជាទីមោទនៈ ដើម្បីបុព្វហេតុបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ ជាពិសេសបានធ្វើការសម្របសម្រួល និងសហការយ៉ាងល្អជាមួយមិត្តជប៉ុន ធ្វើឱ្យព្រឹត្តិការណ៍នេះរាចប្រព្រឹត្តទៅប្រកបដោយភាពអធិកអធម។

ការជួបជុំគ្នាថ្ងៃនេះ ពិតជាមានអត្ថន័យដ៏វិសេសវិសាល។

ទី១.ស្ថានហាលនេះ គឺជាផ្លូវដ៏សំខាន់សម្រាប់ចេញ ចូលប្រាសាទអង្គរវត្ត ដែលជាប្រាសាទមួយប្រកបដោយអត្ថន័យយ៉ាងជ្រាលជ្រៅសម្រាប់ប្រជាជាតិខ្មែរ ព្រោះជានិមិត្តរូបជាតិ ជាស្នាដៃស្ថាបត្យកម្មនិងវិស្វកម្មដ៏កំពូលរបស់បុព្វបុរសខ្មែរនាសម័យនោះ ដែលបានកសាងស្ថាននេះលេចឡើងយ៉ាងត្រដែតលាតសន្ធឹងកាត់ផ្នែកសិណដ៏ធំ និងជាបូជនីយដ្ឋានសាសនាដែលធំជាងគេលើពិភពលោក។ ប្រាសាទអង្គរវត្តត្រូវបានកសាងឡើងដើម្បីឧទ្ទិសដល់ព្រហ្មញ្ញសាសនានៅសតវត្សទី១២ ហើយនៅសម័យក្រោយមក ត្រូវបានឧទ្ទិសដល់ព្រះពុទ្ធសាសនាថេរវាទវិញ។ ជាងនេះទៀត គេជឿថា ស្ថានដែលយើងឆ្លងកាត់សព្វថ្ងៃនេះ គឺជាស្ថានដែលអតីតព្រះមហាក្សត្រខ្មែរ ព្រះបាទសុរិយវរ្ម័នទី២ ធ្លាប់បានយាងចេញចូលប្រាសាទកាលពីប្រមាណ ១ពាន់ឆ្នាំមុន ដើម្បីបំពេញកិច្ចសាសនា និងពិធីផ្សេងៗ។ តាមអត្ថន័យខាងសាសនា និងជំនឿ ស្ថានហាលនេះ គឺជាស្ថានចម្លងមនុស្សលោកទៅកាន់ឋានទេព ពោលគឺ ភ្ជាប់ឋានមនុស្សទៅឋានរាជិទេព។ ដោយសាររាយការណ៍ដ៏ចំណាស់ ស្ថាននេះមានការខូចខាតជាច្រើន ហើយត្រូវបានធ្វើការជួសជុលដោយផ្នែក ជាបន្តបន្ទាប់។ ក្នុងទសវត្សរ៍១៩៦០ សាលាបារាំងចុងបូព៌ាបានជួសជុលពាក់កណ្តាលខាងត្បូងនៃស្ថានហាលនេះ។ ដោយសារកាលទេសកម្មជាមានសង្គ្រាម ការជួសជុលត្រូវបានរាក់ខាន រហូតមកដល់ឆ្នាំ១៩៩៦ ទើបក្រុមអ្នកជំនាញជប៉ុននៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា បានសហការជាមួយអ្នកជំនាញខ្មែរនៃរាជ្យាធរជាតិអប្សរា ចាប់ផ្តើមធ្វើការជួសជុលផ្នែកដែលនៅសល់ ដោយក្នុងដំណាក់កាលទី១ មានរយៈពេល១២ឆ្នាំ សម្រេចបាន

ប្រវែង៩០ម៉ែត្រ នៅសល់មួយកំណាត់ប្រវែងប្រមាណ១០០ម៉ែត្រទៀត មិនទាន់បានជួសជុលនៅឡើយ ហើយគម្រោងដំណាក់កាលទី២ ដែលយើងកំពុងធ្វើពិធីបើកការដ្ឋាននាពេលនេះ នឹងបន្តការងារជួសជុលនេះទៀត។

ទី២.ព្រឹត្តិការណ៍ថ្ងៃនេះ ក៏ជាសក្ខីភាពឆ្លុះបញ្ចាំងឱ្យឃើញនូវស្មារតីសហប្រតិបត្តិការ និងសាមគ្គីភាពជាអន្តរជាតិយ៉ាងរឹងមាំ ក្នុងបុព្វហេតុដើម្បីការពារ ថែរក្សា និងអភិរក្សបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌របស់មនុស្សជាតិ ស្របតាមទិសស្លោក **«បេតិកភណ្ឌដើម្បីទាំងអស់គ្នា ទាំងអស់គ្នាដើម្បីបេតិកភណ្ឌ»** ពោលគឺ កាលណាបេតិកភណ្ឌជាតិមួយត្រូវបានចុះក្នុងបញ្ជីបេតិកភណ្ឌពិភពលោក គឺមិនត្រឹមតែប្រជាជាតិដែលជាម្ចាស់សម្បត្តិបេតិកភណ្ឌនោះ ប៉ុណ្ណោះទេ ប៉ុន្តែថែមទាំងប្រជាជាតិទាំងអស់នៅលើសកលលោក មានកាតព្វកិច្ចការពារ ថែរក្សា និងអភិរក្សបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ឱ្យបានគង់វង្ស។ ស្មារតីសហប្រតិបត្តិការ និងសាមគ្គីភាពជាអន្តរជាតិនេះហើយ គឺជាមូលដ្ឋានគ្រឹះដ៏រឹងមាំរបស់ ICC-អង្គរ ដែលមានឈ្មោះពេញថា **«គណៈកម្មាធិការអន្តរជាតិសម្របសម្រួលកិច្ចគាំពារ និងអភិវឌ្ឍន៍រណីយដ្ឋានប្រវត្តិសាស្ត្រអង្គរ»** ដែលជាដៃគូសហប្រតិបត្តិការយ៉ាងមានប្រសិទ្ធភាពរបស់រាជ្ជាធរជាតិអប្សរា រយៈពេលប្រមាណ ២៣ឆ្នាំមកនេះ ហើយយន្តការនេះ ត្រូវបានពិភពលោកចាត់ទុកជាគំរូ និងបានយកទៅអនុវត្តនៅបណ្តាប្រទេសមួយចំនួនថែមទៀតផង។ គួររំលឹកថា គណៈកម្មាធិការនេះ ត្រូវបានបង្កើតឡើងនៅឆ្នាំ១៩៩៣ នៅទីក្រុងតូក្យូ ប្រទេសជប៉ុន ដោយមានប្រទេសជប៉ុននិងបារាំងធ្វើជាសហប្រធាន គឺ ក្រោយពីសេចក្តីអំពាវនាវរបស់ព្រះមហាក្សត្រ ព្រះចៅជាតិខ្មែរ ព្រះបរមរតនកោដ្ឋ សម្តេចព្រះ **នរោត្តម សីហនុ** ដល់សហគមន៍អន្តរជាតិ ឱ្យជួយសង្គ្រោះប្រាសាទអង្គរដែលកំពុងទ្រុឌទ្រោមខ្លាំង និងបន្ទាប់ពីអង្គរត្រូវបានចុះក្នុងបញ្ជីបេតិកភណ្ឌពិភពលោករបស់អង្គការយូណេស្កូ នៅឆ្នាំ១៩៩២។ រហូតដល់បច្ចុប្បន្ន ក្នុងក្របខ័ណ្ឌICC-អង្គរ យើងបានកៀរគរការចូលរួមពីក្រុមអ្នកជំនាញការអន្តរជាតិជាង៣០ មកពីប្រទេសចំនួន២៣ ដែលបាននិងកំពុងធ្វើសហប្រតិបត្តិការជាមួយរាជ្ជាធរជាតិអប្សរា ក្នុងការអភិរក្ស និងជួសជុលប្រាសាទ សរុបមានចំនួនជាង៧០គម្រោង។ ដោយសារកិច្ចខិតខំប្រឹងប្រែងរួមគ្នាជាអន្តរជាតិនេះហើយ ទើបរណីយដ្ឋានអង្គរត្រូវបានជួយសង្គ្រោះឱ្យរួចផុតពីស្ថានភាពគ្រោះថ្នាក់ ហើយនៅឆ្នាំ២០០៤ គណៈកម្មាធិការបេតិកភណ្ឌពិភពលោក បានសម្រេចដករណីយដ្ឋានអង្គរចេញពី **«បញ្ជីបេតិកភណ្ឌប្រឈមនឹងគ្រោះថ្នាក់»**។ ជប៉ុនគឺជាប្រទេសមួយក្នុងចំណោមប្រទេសជាច្រើនទៀត ដែលបានដើរតួនាទីយ៉ាងសំខាន់នៅក្នុងដំណើរការនេះ ដោយបានផ្តល់ជំនួយហិរញ្ញវត្ថុ និងបច្ចេកទេសជាច្រើនដល់កម្ពុជា ជាពិសេសផ្នែកអភិរក្សនិងជួសជុល

ប្រាសាទនៅតំបន់អង្គរ ក្នុងនោះរួមមានការដ្ឋានអភិរក្សនិងជួសជុលប្រាសាទបាយ័ន និង ស្ថានហាលនេះ ជាដើម។

- ឯកឧត្តម លោកជំទាវ អស់លោក លោកស្រី
- បងប្អូនប្រជាពលរដ្ឋ និងក្មួយៗសិស្សានុសិស្សជាទីមេត្រី

រាជរដ្ឋាភិបាលកម្ពុជា ក្រោមការដឹកនាំប្រកបដោយឥតិបណ្ឌិតរបស់ **សម្តេចអគ្គមហាសេនាបតីតេជោ ហ៊ុន សែន** នាយករដ្ឋមន្ត្រីនៃព្រះរាជាណាចក្រកម្ពុជា បាននិងកំពុងយកចិត្តទុកដាក់គិតគូរយ៉ាងច្បាស់លាស់និងដោយប្រយ័ត្នប្រយែង ក្នុងការថែរក្សាការពារ អភិរក្ស និងអភិវឌ្ឍបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ជាតិប្រកបដោយចីរភាព ធ្វើយ៉ាងណាក្សានូវតុល្យភាពរវាងការអភិវឌ្ឍនិងការអភិរក្ស ស្របតាមទស្សនាទាន «អភិរក្សដើម្បីអភិវឌ្ឍនិងអភិវឌ្ឍដើម្បីអភិរក្ស» សំដៅទាញយកប្រយោជន៍សមស្របសម្រាប់ការអភិវឌ្ឍប្រទេស និងផ្ទេរមរតកដ៏មានតម្លៃនេះទៅដល់ជំនាន់ក្រោយៗទៀត។

ការយកចិត្តទុកដាក់របស់រាជរដ្ឋាភិបាលនៅក្នុងវិស័យបេតិកភណ្ឌ បានស្តែងចេញតាមរយៈកិច្ចខិតខំប្រឹងប្រែងជាប់មិនដាច់ និងការដាក់ចេញនូវគោលនយោបាយផ្សេងៗ ដោយទទួលបានសមិទ្ធផលយ៉ាងច្រើនជាបន្តបន្ទាប់នាពេលកន្លងមក។ ជាក់ស្តែង បន្ទាប់ពីជោគជ័យដ៏ធំធេងក្នុងការចុះប្រាសាទព្រះវិហារជាទីសក្ការៈ ក្នុងបញ្ជីបេតិកភណ្ឌពិភពលោកកាលពីឆ្នាំ២០០៨រួចមក ថ្មីៗនេះ យើងបានខិតខំរៀបរយការគាំទ្រពីសហគមន៍អន្តរជាតិ សម្រាប់ការបង្កើតគណៈកម្មាធិការសម្របសម្រួលអន្តរជាតិមួយទៀតសម្រាប់រមណីយដ្ឋានប្រាសាទព្រះវិហារ (ICC-ព្រះវិហារ) ដោយជោគជ័យ ដោយយកតាមគំរូនៃ ICC-អង្គរ។ សម័យប្រជុំលើកដំបូងរបស់ ICC-ព្រះវិហារ ត្រូវបានចាត់ទុកថាជាជោគជ័យដ៏ធំធេងជាប្រវត្តិសាស្ត្រ ហើយតំបន់ប្រាសាទព្រះវិហារ ដែលពីមុនធ្លាប់ជាតំបន់ទំនាស់យោធា និងការទូត បច្ចុប្បន្នត្រូវបានប្រែក្លាយជាតំបន់មានសន្តិភាព និងសហប្រតិបត្តិការពេញលេញ។ បច្ចុប្បន្ន គម្រោងជួសជុលនិងអភិរក្សប្រាសាទមួយចំនួនកំពុងរៀបចំដំណើរការអនុវត្ត។ នេះគឺជាជោគជ័យដ៏ធំធេងថ្មីមួយទៀតសម្រាប់បេតិកភណ្ឌវប្បធម៌បន្ថែមលើសមិទ្ធផលជាច្រើននៅក្នុងក្របខ័ណ្ឌនៃ ICC-អង្គរ។

ទន្ទឹមនឹងសមិទ្ធផលជាច្រើននៅក្នុងការការពារ និងអភិរក្សបេតិកភណ្ឌ ដែលយើងខិតខំសម្រេចបាននាពេលកន្លងមក ក៏នៅមានបញ្ហាប្រឈមមួយចំនួនដែរ ដោយហេតុថាការថែរក្សាការពារ និងការអភិវឌ្ឍបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ គឺជាកិច្ចការគ្មានទីបញ្ចប់ ប្រកប

ដោយវិសាលភាពធំធេង ដែលត្រូវការនូវធនធានមនុស្សប្រកបដោយចំណេះដឹងនិង
ជំនាញពិតប្រាកដ និងថវិកាសមស្រប។ ជាងនេះទៅទៀត វាទាមទារនូវការខិតខំប្រឹង
ប្រែងជាប់ជាប្រចាំពីក្រសួង ស្ថាប័នពាក់ព័ន្ធ និងការចូលរួមយ៉ាងសកម្មពីសំណាក់ដៃគូ
អភិវឌ្ឍជាតិនិងអន្តរជាតិ វិស័យឯកជន និងប្រជាជនទាំងអស់។ ក្នុងន័យនេះ ក្នុងនាមរាជ
រដ្ឋាភិបាលកម្ពុជា ខ្ញុំសូមអំពាវនាវដល់ប្រទេសជាមិត្ត ដៃគូអភិវឌ្ឍជាតិនិងអន្តរជាតិ សូម
បន្តជួយគាំទ្រដល់កិច្ចខិតខំប្រឹងប្រែងទាំងនេះ ទាំងបច្ចេកទេស ហិរញ្ញវត្ថុ និងធនធាន
មនុស្ស ហើយក្រសួង ស្ថាប័នពាក់ព័ន្ធ ព្រមទាំងប្រជាពលរដ្ឋទាំងអស់ ត្រូវចូលរួមសហការ
គ្នាឱ្យបានល្អ ទៅតាមភារកិច្ចរៀងៗខ្លួន ក្នុងរបេសកកម្មដ៏ឧត្តុង្គឧត្តមដើម្បីថែរក្សា ការពារ
និងអភិរក្សបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌របស់មនុស្សជាតិ ពោលគឺ ដើម្បីយើងទាំងអស់គ្នា។

មុននឹងបញ្ចប់ ខ្ញុំសូមយកឱកាសនេះដើម្បីសម្តែងនូវអំណរគុណជាថ្មីម្តងទៀតដល់
ប្រទេសជប៉ុន ព្រមទាំងបណ្តាប្រទេសជាមិត្ត អ្នកជំនាញជាតិនិងអន្តរជាតិ ក្រសួង ស្ថាប័ន
និងប្រជាពលរដ្ឋទាំងអស់ ដែលបានខិតខំរួមគ្នាដើម្បីរក្សាតម្លៃលេចធ្លោជាសាកលរបស់
រមណីយដ្ឋានអង្គរ ជាបេតិកភណ្ឌពិភពលោក ឱ្យបានស្ថិតស្ថេរគង់វង្ស។

ជាទីបញ្ចប់ ខ្ញុំសូមជូនពរឯកឧត្តម លោកជំទាវ អស់លោក លោកស្រី ភ្ញៀវភិក្ខិយស
ជាតិនិងអន្តរជាតិ បងប្អូនប្រជាពលរដ្ឋ និងក្មួយៗសិស្សានុសិស្សទាំងអស់ សូមមាន
សុខភាពល្អ ទទួលបានជោគជ័យលើគ្រប់ភារកិច្ច និងមានសុភមង្គលក្នុងគ្រួសារ។

ខ្ញុំសូមប្រកាសបើកការដ្ឋានជួសជុលស្ថានហាលនៃប្រាសាទអង្គរវត្ត ចាប់ពីពេល
នេះតទៅ។

សូមអរគុណ!